



Matsumoto Shigeru

他言語が紡ぐ 「世界とのつながり」

言語の本質とは、語学がもたらすものは何か。

NHK英会話番組の講師を長く務め、コミュニケーション教育の専門家である松本 茂教授と
25の言語を駆使し世界の辺境を巡るノンフィクション作家の高野秀行さんに伺いました。



Takano Hideyuki



東京国際大学
言語コミュニケーション学部 教授
松本 茂さん

まつもと・しげる ● 1955年生まれ。専門はコミュニケーション教育学。マサチューセッツ大学ディベートコーチ、東海大学教授、立教大学教授(現名誉教授)などを経て2021年4月より現職。『おとなの基礎英語』ほかNHK番組(Eテレ、ラジオ)への出演多数。現在「中学生の基礎英語レベル2」講師。全国高校英語ディベート連盟(HEnDA)副理事長。東京都英語村(TGG)プログラム監修者。

PART1

言語によって思考は深まり、 人と人との関係は築かれる

コミュニケーションとは そこに「ある」もの

よく、「英語はあくまでツール」と言われます。「大切なのは、英語を使って何をするか」ということなのはわかりますが、個人的には少し引っかけフレーズです。言語とは単なる道具やスキルではなく、もっと奥深いもの。思考や感情を紡ぎ、人と人との絆を深めるものだと考えているからです。

実際、外国語に触れると、日本人同士の会話では発想し得ないことも含め、さまざまな

意見に出合います。特に英語は、話者の数も人種も多く、発信される情報量が桁違いであるため、多種多様な側面から物事に触れることになり、思考を深めることができます。これが私が思う、言語を学ぶ一つ目の意義です。

もう一つの意義は、他者との関係性を築き、つながるために必要な媒介だということです。

それについて述べる前に、「つながる」とはどういうことか、私の専門であるコミュニケーション学の立場から補足させてください。コミュニケーションとは「とる」ものではなく、「ある」もの、という捉え方です。

取材・文／堀水潤一 撮影／丸山 光



例えば、私の講義中、前の席に座る学生は熱心に耳を傾け、ときおり質問もする一方、後ろの席の学生はスマホをいじっているとします。そのとき私は前の席の学生とだけつながっているかといえば、そんなことはありません。後ろの席の学生も、スマホを使うという行為を通して「授業内容が難しすぎかな」「やめるよう注意すべきかな」と私に考えさせるなど、影響を与えているからです。つまり、ある空間を誰かと共有している限り、意識的・無意識的にかかわらず、また浅い・深いという程度の差はあっても、そこに関係性は存在しているのです。

その意味では、あなたが外国人と場を共有した際、英語が苦手という理由で、うつ向いては、関係性が深まらないどころか、本心とは異なるメッセージを相手に与えかねません。

反対に、「言葉」を介すことで、人と人は、より深い関係性を築くことができます。英語で繊細なニュアンスまで伝えられるようになり、「これを言ったら失礼になる」といったことまでわかってくると、異なる文化をもつ人間同士でも、関係はより深まっていくでしょう。

もちろん、母語ではないため、英語で会話をすると、言いたいことがうまく伝えられないも

どかしさも感じます。そうした感覚は、反対の立場に置かれた人に思いをはせることにもつながります。来日して日が浅い留学生はもちろん、日本に定住しながらも日本語を不自由にしている人は大勢います。そうした人たちが日々感じている、言いたいことをうまく表現できない辛さは、英語でうまく意思を伝えられない辛さと同じはずです。

趣味から始める英会話 英語ディベートにも期待

「つながり」という点で言えば、ICTの普及によって世界中の人とつながることが可能になりました。私の趣味は釣りですが、日本にいなからYouTubeにアップされる世界中の釣り動画を楽しんでいますし、SNSを通じて米国の釣り仲間とも交流しています。英会話の学習も、趣味から入るといいでしょう。野球好きならばメジャーリーグのサイトを閲覧するなど、好きなことや得意なことから始めてみる。専門的な知識があるため、わからない言葉が出てきても類推できますし、何より、楽しみながら学べます。その際、頭の中で日本語に訳さず、英語を英語のまま理解し、話すことに慣れる



国際色豊かな東京国際大学キャンパス(埼玉県川越市)には、留学生の出身国の国旗が並ぶ。

ことが上達への近道です。

学校の授業に関して言えば、大切なのは、教室の中に「学び合う関係性」がつけられていること。「この先生になら、言いたいことを言える」「この仲間に対してならば発言できる」という信頼関係があり、安心して自己開示 (self-disclosure) できることが、会話を伴う学習には欠かせません。

そうした環境がある前提でお勧めしたいのは、4技能5領域を統合した学習でもある「ディベート」です。よく「うちの生徒に英語でのディベートなんて無理」と言われますが、学習指導要領で同じく明示されている「ディスカッション」よりも易しいと思います。ディスカッションは、みんなの前で自分の意見を表明しなくてはいけないため、多感な時期にある高校生にはハードルが高いかもしれません。一方、ディベートでは、自分の考えをさらけ出す必要はありませんし、論題が与えられるうえ、肯定側・否定側と立場が決まっているので気が楽です。

本心では否定側の立場であると感じている論題に、敢えて肯定側の立場で考えることで、これまでなかったモノの見方ができ、新しい自分に気づくこともあるでしょう。

論題も、初めのうちは「制服廃止」など軽めのもので十分です。安楽死合法化や死刑廃止など、生徒によっては難解で関心をもてないテーマを選んでしまうと失敗の素。とはいえ、ディベートには話す内容に関する理解が求められるため、他教科の学びにもつながります。結局のところ、英文が理解できるかどうかは、内容についてある程度の知識があるかどうか

との関係性が強いと思います。本を読み、時事ニュースに触れ、人の話を聞くことで、物事を多面的に考えられるようになるし、読解力も高まります。他教科で学ぶことすべてが生きているのが英語の時間です。英語を中心としたクロスカリキュラムができる可能性もあるでしょう。

多様であることを知り、 同じであることも知る

人間らしい豊かな知的活動をするためには、他者との関わりが欠かせません。日本語しかできない人と比べ、外国語を操ることができる人は、さまざまな情報や考え方を吸収しやすくなり、世界観が広がります。

世界の広さを知る一方で、人はそんなには変わらないことも実感するはずです。几帳面な人もいるし、いい加減な人もいる。良い人もいれば、嘘つきもいる。世界のどこでも同じです。

表面的には異なる国民性に見えても、根っこは一緒であることにも気づくでしょう。例えば、日本人が海外に駐在する場合、家族を残して単身赴任するケースが多いですが、現地の方は「なぜ家族を連れてこないんだ。愛していないのか」と不思議がります。でも、子育てや受験のことを考えると日本に残した方が子どもの幸せになると判断しているケースもあります。

家族を愛しているからこそ、片や一緒に暮らすし、片や離れる選択をする。そうした背景まで含め、きちんと説明できる力があれば、人はもっとわかり合えるし、関係性はより深まっていくことでしょう。

ノンフィクション作家 高野秀行さん

たかの・ひでゆき ● 1966年生まれ。早稲田大学探検部在籍時に書いた『幻獣ムベンベを追え』（集英社文庫）で作家デビュー。「誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白おかしく書く」がモットー。タイ国立チェンマイ大学日本語科、上智大学外国語学部での講師経験も。『謎の独立国家ソマリランド』（集英社文庫）で講談社ノンフィクション賞受賞。7月に新刊『イラク水滸伝』（文藝春秋）を出版。



PART2

情報を伝えるための言語と 親しくなるための言語

言語の二刀流に目覚めた 私の“語学ビッグバン”

学生時代、ムベンベという幻の怪獣を探しにコンゴの奥地の村に滞在しました。その時です。私の中で“語学ビッグバン”というべき現象が起きたのは。

今でこそ「学んだ言語は25以上！ 辺境ノンフィクション作家の超下級語学体験記」と帯で謳われた書籍『語学の天才まで1億光年』を出版するほどの言語マニアの私ですが、中高時代の英語は他教科同様、義務的に学習

していただけ。ただ、雑誌『ムー』を愛読し、世界中を探検するという目標がありましたから、語学の必要性は感じていました。

念願叶って大学の探検部に所属したものの、私には特技や経験が何もありません。せめて片言の外国語くらいは話そうと思いました。そのためコンゴ遠征の際は、公用語の仏語に加え、現地で使われるリンガラ語を習得して臨みました。すると、現地の人たちに思いのほかウケたんです。それまで各地で、英語や仏語を話しても反応は薄かったのに、そこでは簡単な会話をしただけで目を輝かせてもらえるこ

取材・文／堀水潤一 撮影／吉永智彦

とに、感じたことのない快感を覚えました。

そして確信します。言語には、「情報を伝えるための言語」と「親しくなるための言語」の二種類があると。この二つが備われれば最強です。語学の二刀流を使いこなす喜びを知り、私の言語宇宙は一気に膨張することになりました。世界中どこに行くにしても、現地の言葉をゼロから学ぶ習慣がついたのです。

私のこの体験を基に、「将来、外国で仕事をする際は、英語だけではなく現地語を学ぶといいですよ」と勧めるのは簡単ですが、英語を学ぶだけで精いっぱい的高校生には荷が重いかもしれません。なので、こう考えてみてください。一つの言語の中にも、先ほどの二つの側面があると。例えば、機械翻訳の精度がいくら高まってもAIでできるのは「情報を伝えるための言語」の役割まで。通訳を通じた会話にも似て、デジタルを介したところで、相手と心が通じ合うまではいかないでしょう。

わかりやすい例がシリコンバレーです。なぜ多くのスタートアップがわざわざ集うのか。ICTのエキスパートなんだから場所を選ばずともいいじゃないですか。そうしないのは、同じ空間を共有し、無駄話や軽口など、どうでもいいことを話すことで関係性を築いているからだと思うんです。その際、共通語として使われることが多いのが英語であり、だからこそAI時代においても英語を学ぶ意味はなくならないと思います。

語学力の半分は 相手に委ねられている

語学ビックバンに先立ち、私の語学観を変

える、ちょっとした出来事がありました。自動車教習所の講義で教官がこう話してくれたんです。「皆さん、路上での運転が不安だと思いますが、大丈夫です。他のドライバーは皆さんより上手ですから、ぶつかりそうになったらよけてくれます」と。心が軽くなったとともに、外国語の会話も同じだと感じました。コミュニケーションは共同作業。こちらがたどたどしくても、相手がうまければきっと助けてくれる。そうでないと会話が成立せず、向こうも困りますから。

英会話講師を長く勤める知り合いのアメリカ人は、「ほとんどの日本人と英語で会話できる」と自慢げに話していました。相手の英語が下手でも、こちらがスピードを緩めたり、言い回しを変えたりすることで会話が成り立つと言うのです。ということは、そのアメリカ人ががんばることで、ほとんどの日本人は英語を話せることになるじゃないですか。では語学力って何なのか、という話になりますよね。個人の中にある“絶対的語学力”は、せいぜい半分ぐらいで、残りは、相手側にも左右される相対的なものだと思っています。

ネイティブと非ネイティブ、 グローバル英語を話すのは？

そういう私も、ネイティブの話す英語は聞き取れないことが多いんです。けれど、非ネイティブの話す英語に問題を感じたことはあまりありません。

同様のことを語る非ネイティブは大勢います。知人の作家に聞いた話ですが、約40カ国の文学者がアメリカの地方に集まり、数カ月共

同で創作活動をしたそうです。全員が非ネイティブで共通語は英語。それで問題なかったのに、たまに現地のアメリカ人と交流するとき、その人の話す英語がみんなよく理解できなかったとか。非ネイティブ同士は意思疎通できるのに、ネイティブとだけはできない。こうなると、ますます語学力ってなんだとってしまいます。

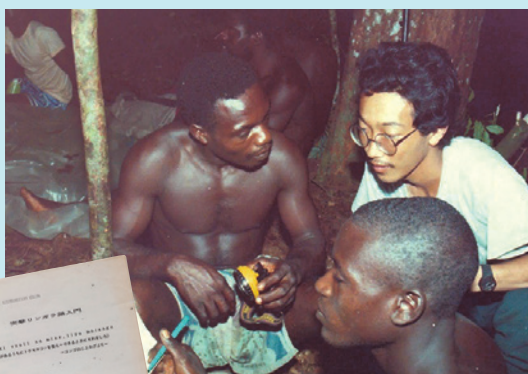
ちなみに、現在、英語を話す人は世界に15億人以上いて、その4分の3くらいは非ネイティブだそうです。となると、英語には2種類あるんじゃないか。インド人や中国人ほか、世界中の人が話す英語が数の上では“グローバル英語”であり、英米人やオーストラリア人が話す英語は、むしろ“ローカル英語”ではないかと。そう考えると、私たち日本人は、ネイティブの英語にこだわる理由がないと思うんです。友人のインド人やシンガポール人がよく「日本人はなぜアメリカ人やイギリス人の英語講師にこだわるのか」とこぼしていますが、他の言語はともかく、英語に関しては非ネイティブに習ってもいいと思います。

大切なのは伝わること。 だから固有名詞が大事

話を戻します。「親しくなる」という点でも、実用的という点でも、語学を学ぶ際、私が最も重要だと考えているのは固有名詞です。知らない土地に行って何が問題になるかという土地名や人名、店名や食べ物の名前だと思います。有名な例だとマクドナルドの発音ですよね。誰もが知る店なのに、音が拾えなければ、何を話してるのか理解できない。

高野さんの印象に残る言語

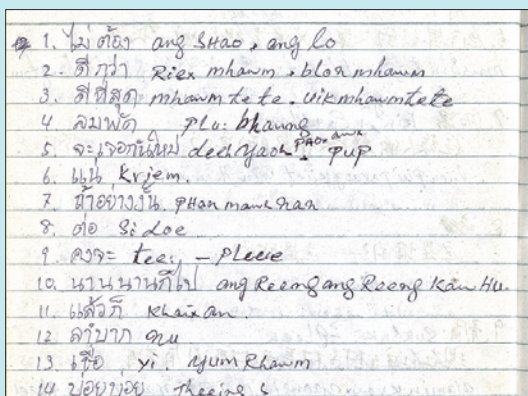
リンガラ語 (コンゴ)



高野さん自作の14ページからなる『突撃リンガラ語入門』。読み返すと今も30年以上前の記憶が蘇るとか。滞在先では、さらに、村の言葉であるボミタバ語まで学習。

撮影 伊豆倉一

ワ語 (ミャンマー・ワ州)



「国家」の支配下に置かれたことのない不思議の地、ミャンマーのワ州。ここで話される言葉を、中国出身のワ人の牧師にタイ語で習っていた際の自作ノート。

ソマリ語 (ソマリア)



最も難しかった言語は、アフリカ東部で話されるソマリ語とのこと。助詞が動詞に付く変わった文法に苦戦。写真は「海賊の首都」と呼ばれるボサソで護衛兵士と。

逆に言えば、相手がマクドナルドの話をしているとわかれば、大体的内容は理解できるものです。

また、東京駅構内で外国人が「オーサカ、オーサカ」と困り顔で話していたら、99%「大阪行きの新幹線に乗りたい」と訴えているわけです。伝えたいことの核心さえ通じれば何とかなる。そのためには、まず世界的に有名な場所や人やメーカー、食品の発音練習をすべきでしょう。

モチベーションを促す “妄想語学”のすすめ

大切なのは、伝えたいことがあるかどうか。その意味で、語学で大切なのは、何のために学ぶのかというモチベーションです。私の場合、「コンゴで幻の怪獣を探すため」とか「ソマリアの海賊の実態を知るため」といった明確な目的があるため、必死です。

けれど、学校の授業にはそれがありません。また、教科書に掲載された一般化された文章には、誰に対して何のために話すのか、という視点が抜け落ちがちです。普通、言葉を使う際は、町を歩きながらとか、ご飯を食べながらといったシチュエーションがあるわけで、何を話題にしているかなんとなく理解できます。ところが座学では頭の中だけで学ぶため、それができない。学校の授業というのはいちばん難易度が高いんです。

言語を学ぶということは、情景が浮かぶこと、または体で感じることです。リングラ語で会話の練習をしているときなどは、彼方の存

在だったアフリカが体の中に入ってくる気がしました。

今はICT機器の普及で動画を見ながら学ぶことも増えているでしょう。私なら、そうした機器を活用し、生徒ごとに架空の設定をつってもらいロールプレイングするような授業を試してみたいです。いわば“妄想語学”。「ハリウッドに住みセレブ生活をしたい」という妄想であれば、物件探しから始めないといけません。現地の不動産サイトを閲覧すると、驚くほど高額な家賃相場がわかります。そうやって楽しみながら学ぶわけです。

試しに私も、「義姉夫婦が住むシドニーでひと月居候する」というリアルな設定で妄想したところ、多くの気づきがありました。料理ぐらいいは手伝わねば、と思い地図サイトで食料品店を探すと、近所に大きなスーパーのチェーンが5つあることがわかりました。それらを地元の人がどう発音するかもチェックします。YouTubeで買い物動画を視聴すると各店舗の品揃えも把握できましたし、棚から商品を手取る動作について、takeでもgetでもなく、grabという動詞を使うことも知りました。国によって言い方は違うかもしれません。でも、いいんです。なぜならシドニーで暮らす妄想をしているんだから。そうこうしているうち、私は今、とっってもシドニーに行きたい気分になっています。

高校生に「将来、英語を使って何がしたい？」と聞いても、明確な答えが返ってくることは少ないでしょう。考えたことがないし、言語化もしてこなかったからです。なので妄想で

いいから行動に移すと、だんだん「本当にやったら面白そうだな」となるんじゃないか。あるいは友人の妄想を知ること、実はハリウッドセレブとかどうでもよくて、外国のアニメオタクと友達になりたいという欲求に気づくかもしれません。そうしたことが、語学学習に対するモチベーション形成の一助になれば、と思っています。

エンジニアリング的学習と ブリコラージュ的学習

ブリコラージュという言葉をご存知でしょうか。フランスの文化人類学者レヴィ=ストロースが唱えた概念で、あり合わせの材料を使い、その場しのぎの手探りでモノを作ることです。

その対立概念がエンジニアリングで、決められた材料や道具を用い、定められた手順に従ってモノを完成させることです。

学校で行われる積み上げ式の語学教育が“エンジニアリング的学習”だとすれば、私のしてきたのは、まさに“ブリコラージュ的学習”。身近にいるネイティブを捕まえてひたすらモノマネするなど、今できる方法をフル活用して学び、しかも覚えるフレーズは「その謎の魚を見たら謝礼をあげるので連絡ください」とか、「身代金の相場はいくらですか」といった取材に直結したものばかり。そして、目的を果たすと、いつの間にか忘れてしまうものだからです。

そうした学習法があってもいいのではないかな。あるいはエンジニアリング的学習との組み合わせが有効ではないか。その時々目的に応じて臨機応変に変えられるのがブリコ

ラージュの強み。変化の激しい時代にこそ求められるのではと思います。

もちろん、体系的な学習が必要なことは言うまでもありません。特に、日本の英語教育においては、「読む」もしくは「書く」に関して、かなりの力が養われることが知られています。そうしたベースがあって学び始める英会話と、なしのそれでは雲泥の差。「聞く」「話す」についても一気に伸びていくはずです。

思うに、語学ほど努力が結果に結びつく学習はありません。そして、できないと思い込んでいたことが、できるようになる感覚は人間として、この上ない喜びのはずです。高校生にとっての語学って義務感の塊かもしれませんが、面白いものだという事は知ってほしい。外国の人に食事をふるまったとき、deliciousやgoodよりも、「オイシイ」と言ってくれたら嬉しいですね。自分たちを受け入れてくれた感覚にもなるでしょう。それと同じことを相手にするだけです。今、日本に多くの外国人がいて、なかには怖そうに見える人もいます。そういう人たちに、相手の国の言葉で挨拶するだけで、パッと顔が明るくなり、仲良くなれる。それは驚くべきことなんです。語学は、人の心を開く魔法の剣だと思います。

語学の天才まで1億光年 (集英社インターナショナル)

英語、仏語、スペイン語、タイ語から、ケシ栽培の取材で滞在したミャンマー・ワ州のワ語まで、著者特有の言語観・語学観が満載。20代までの語学遍歴を綴った青春記でもある。コロナ禍で辺境取材ができない時期に執筆した入魂の一冊。

